東魏天平觀音石像

（支那直隷省磁州槐樹屯出土）

往來を止め入貨の偷漏を防ぎしが南宋には回舶に期限を定めて脫稅を防ぐ制あり。四、凡そ輸入舶貨既に抽解收買を經れば餘は舶商の自賣を許し其州界內にて更に課稅せらるゝなく、此時文引と貨名數量を記せる販賣許可證を給す。此事は太宗の朝より行はれしが如し。五、宋は夙に市舶の利大なるを認め舶司にて人を派し公據を齎して蕃國に赴き來朝を促せるあり其來るや犒禮懇勤を極め又進奉を名とする者は概ね抽解せず。六、銅錢出口の嚴禁は太祖の時に始りしが銅は種々の名義にて闌出し遂に南宋の錢荒時代を現出せり。尙ほ七、官吏作弊防止規定にも諸條項あり、八、漂着又は居留蕃人に對しても夫々制規あるを說けり。此全研究は史料として著者が吳興の劉承幹氏藏宋會要（永樂大典より抄出）を謄寫せるを主とし宋史、建炎以來朝野雜記、玉海、諸蕃志、文獻通考、通鑑、羊城古鈔、粵史、萍洲可談等以外にも宋人の隨筆類各地の地誌類等を博引旁搜して如上の體統を附せる八十頁の長篇なり。

◉支那の古銅器と土器との關係に就て

文學士　濱田耕作

（東洋學報　第七卷第二號所載）

「一、緖論」に古銅器は支那に於ける考古學的遺物の中最も古く最も著しきものなれども其學術的價値乏しきは殆ど存在。發見の狀態を知るを得ざるを以てなりといひ、「二、土器の銅器に及ぼせる影響」には瓦鬲の鼎に於ける、橫帶狀の凹凸ある敦の土器の手法を殘映せる、甑。鬲二器を連續せる銅甗あるが如き、壺。鉢。皿狀の銅器あるが如き是なりといひ「三、銅器の土器に及ぼせる影響」は第二次的なるが銅鼎と全然同形の土鼎あり、銅器を模せる獸環壺。瓦壺。浮彫の打出模樣壺。博山瓦爐。瓦尊あるが如き是なりと說き「四、結論」に於て斯く土器。銅器は密接なる關係あるを以て互に比較考察する時は大に裨益する所あるべく、殊によく時代の好尙を反映して變化著しく又他の副葬品と共に出づる場合多き土器は銅器研究の基礎となすべきものなれば支那古銅器は此新方針に依り土器の助けを俟て研究せられざるべからず云々と論じ二十餘箇の寫眞版を揭げたり。〔以上有高〕

彙　報

◉口繪解說

東魏天平觀音石像

此の石像は大正五年十月北京に於て得たる所に係り、高さ一尺八寸臺幅八寸あり、法隆寺釋迦三尊像の脇侍佛と略ぼ形式を同く

し、六朝佛の正形を具ふ。特に注意すべきは其表面の塗彩にして原と全面光背と共に悉く塗金を施せしものなることは、處々に彩の剝落せる下に粲然たる金箔を認め、造像の當初の金色爛然たりしを想はしむ。彩色は其後に至り施せる所ならんも、清朝初期に修繕せるより久しき以前より塗彩ありて、之を補ひしものならん。今回北支那に獲たる他の六朝佛にも色彩金箔の殘存するものあれども、本像の如く完全に保存されたるものなし、其頭は寶冠を戴かずして方髻を露はせるが、此の髻の形式は頗る普通見る所と特異なるものなり。

臺座の背面に造像銘文あり、其語左の如し。

大魏天平二年十月廿九日、□」信士佛弟子、震威將軍、□朝靖、零奇令、□子班、生□不幸、時在此難、願造觀音」像一軀、圓光二尺、法華一部」令並成就、願以是微、成就」三寶以長延國祚、永化七世」生天、現眷業利、法界四生、」普融茲慶、有心之仇、同登」家。照、

此の字體は殷六朝碑に見る如く、通音の字を用ゐ、震（振）靖（請）零奇（令支）家（嘉欵）等に作れり。就中令支を零奇に作れるは注意すべく、漢書地理志令支の注に孟康曰支音祇とありて、今音「シ」又は「チ」なるも、古音の祇顗の祇に同じく「キ」と讀むべきを知る。此の地は今の直隸省永平府遷安縣西に在り、水經注の濡水に「東南過遼西令支縣北」といふものにして、魏書地形志には陽樂縣の割注として「眞君七年併令支令資屬焉」といふも、其後獨立の縣となりしを見るべし。蓋し北魏永安の末年胡酋落に入り、官司の文籍散逸するもの多く、地形志は東魏武定の世の區劃に從へりといふ。此文により其間の變遷の一端を窺ふに足る。

銘文に「生（遭）二不幸一、時在二此難一」といふは、元魏の末爾朱榮の亂後高歡鄴に據り、宇文氏と北魏の天下を二分し、東魏孝靜帝を擁立したる際なれば此語あるなり

此碑に於て最も珍とすべきは臺座前面の朱文銘にして、

磁州西八里、槐樹屯村南」有古塚、現出觀音石像」一尊、不記年限、金面□□、」有僧寂進、係南人、北行」至觀音堂、刺舌血、書」法華一部、取順治十二」年四月廿日、至六月村□」日、完重修業、彩敕□」難、金容度一切衆生、槐樹屯在會施財男」女大小人等、俱會一堂、」同到彼岸、普度法界」有情、同圓稱智、

皇上順治十二年六月廿九日重修

といひ、此の石像が清朝の初に至り今の直隸省廣平府磁州の西八里の槐樹屯にて發掘されて、重れて祭られし來歷を示し、磁州志によれば、現に州城の西に東西兩槐樹屯あり。年限を記せずといふは、村人大魏の二字讀み難く北朝天平の年號を知らざりし爲め

何代たるを定むる能はざりしならん。此地は高歡の興れる河南彰德府に密邇するが故に、東魏時代彫刻の遺物殘存するものあるなり。〔小川〕

「郷土研究」休刊

大正二年の創刊以來專ら我が土俗學の研究に貢献しつゝありし柳田國男氏主幹「郷土研究」は去る三月發行の「第四卷第十二號」を以て一時休刊するに至れり。此の方面唯一の機關雜誌たりし同誌の此運命に逢着せるは學界の等しく遺憾を感ずる所なり。顧て同誌の業績を考ふるに、既刊の册數已に百に近く、其の論文の範圍は神話、傳說、土俗、方言等に亘り英雄傳說、桃太郎新論、人身御供論、農業神話の如きは高木敏雄氏が年來研究する神話學の見地より我國の傳說のモチーフと其所有者なる我國民の文化狀態の一面を闡明せんと試みたるもの、巫女考は第一卷の初號以來各號に分載せられたる託宣と祭、夷下し、稻荷下し、オシラ神、池袋の石打、蛇神犬神、箱石と笈の塚、賴政の墓等の諸論文と相聯關するものにして柳田氏が匿名の下に發表せられし處、其等は我國の諸地方に散在し巫蠱幻術を營む特殊民の研究にして、同氏の毛坊主考、念佛團体の變遷、片葉蘆考、聖と云ふ部落、夙の者等の一團をなす研究と共に我俗間信仰と賤民種族との問題に亘りて傾聽すべき論議なり。其他、守札考（清原貞雄）牛王の名義と烏の俗信（南方熊楠）龍燈に就て（同氏）龍燈松傳說（尾芝古樟）旗鉾（同氏）猩籠の話（折口信夫）時の鐘（中山太郎）の如きあり、何れか是れ郷土研究が此種研究の興味と解說の端緒を抽出せしものにあらざる。山男外傳資料が我國先住民の問題に接觸することの多き其他諸地方より集る小篇及資料は我國地方民俗と其精神生活の反映を明々地に提示するものにして我國民文化の研究が此の方面の資料にも顧るの要あることを告ぐるものなり。又七ツ塚、境塚等に就いては單なる考古學的の調査に滿足せず、是れより上代の思想を見んとせる、また地名と地形との關係を論じ、種々の方面より古の經濟狀態に及ばんとしたる「郷土研究」同人の努力に對し學界の方に多謝すべき所なるべし。素より其の研究の性質編纂等に多少の改良を望むべき點なきに非ずと雖史學地理學が、此誌より享くること大なりしを思ひ「郷土研究」編者の新なる活動力の下に吾人は早く、其再刊を見んことを希ふものなり。

セイス教授來朝

英國オックスフォード大學アッシリヤ學教授アーチボルド、ヘンリー、セイス博士は、數年前一度來朝せしことありしが、今回又米國を經て去る四月横濱に到著、數日滯京の後入洛せり。博士は

秋季正倉院の開扉を待ちて年來の宿志なる御物拜觀を濟したる上埃及に赴く豫定なりと云ふ。五月京都滞在中は文科大學教官等の案内にて南河内の古墳及石器時代の遺跡を訪ひ、大德寺、平等院萬福寺等に遊び、又伊勢神宮より奈良に赴き、去月初出京せり。九月再び入洛の際には文科大學に於て數回の講義を試む可しと云ふ。

●京都文科大學史學科來學年講義題目

史學研究法	毎週	二	坂口 教授
國史總論		一	内田 教授
日本經濟史		二	
日本の開國		二	
公家と武家		二	三浦 教授
貞永式目の研究		二	
古文書學概論		二	
國史演習		二	
東洋史概説		二	桑原 教授
アラブ人の記錄に見たる支那の風俗		二	
東洋史概説		二	内藤 教授
乾隆嘉慶朝の文化		二	
東洋史籍講讀		二	
最近世史		二	原 教授
儻逸帝國史		一	
西洋史演習		二	
西洋史概説		三	坂口 教授
ビザンツとルネッサンス		一	
地理學通論		二	小川 教授
地理學特論（歐洲）		二	
地圖學		一	
地理學實習		三	
同 演習		二	
人文地理學		一	石橋助教授
經濟地理學各論		二	
清朝史		一	矢野助教授
支那近世外交史		二	
東洋考古學		一	濱田助教授
考古學實習		一	
古代東方國民の文化		二	
朝鮮史（高麗朝）		二	今西助教授
同（二國時代）		一	
土耳古民族史		二	羽田助教授
國史概説		二	喜田 講師
國史地理		二	
支那金石文		一	宮岡 講師
ナポレオン時代史		二	中村 講師
日本文化史		一	西田 講師
人類學		二	足立醫大教授

●京都文科文學卒業論文

京都文科大學本年度の卒業學生にして史學科並に哲學文學兩科中史學に關係ある卒業論文題目左の如し

史學科

國史專攻

御堂關白の研究　神浦萬十郎

蓮如上人に就いての研究　松野　遵崇

西洋史專攻

英國に於ける勞働組合の發達　宮崎　市郎

亞米利加合衆國關稅史概論　（撰科）大久保一峰

最近世史專攻

米國に於ける帝國主義の歷史的發達　（撰科）竹林　熊彦

地理學專攻

近世西藏探險史　下田　禮佐

哲學科

宗教學專攻

親鸞の宗教意義　西野　道元

社會學專攻

德川時代に於る町人精神及其の成立に就て　銅　直勇

印度哲學專攻

支那華嚴史研說　市田　勝道

印度佛教に於ける大乘戒律思想の研究　宮城　信雅

支那に於ける達磨渡來以前の禪　（撰科）後藤　亮一

支那哲學史專攻

支那先秦時代の婚姻に就きて　浦川　源吉

文學科

國文學專攻

柿本人麿　（撰科）五十里秋三

支那語學支那文學專攻

離騷研究　財津　愛象

東坡研究　（撰科）山本　寫賢

●京都帝國大學特別講演

京都帝國大學に於て各科學生及び學外有志の爲めに開く特別講演は其第二十三回を去四月二十七日より五回に渉り開催し、文學博士原勝郎氏の「戰時の歐米」と題する講演ありたり。第一回は前年の同博士講演の後を承けて先づ其以後の材料を得るの困難なる事情を述べ、歐洲各部の戰線、殊びに阿弗利加、小亞細亞方面の

戰爭の消長を概說し、第二回は同盟、聯合兩軍の交戰に從事せる兵員の概數並びに其の死傷を說き、進んで軍事費の概算を示し、第三回は講和問題に入り其の歷史に遡り、既に開戰後一年に其の端を開きしことを說き、又一九一六年十二月十二日には各中立國及び羅馬法王を介して轉じて講和提議をなすに至りし經過を述べ第四回は米國に轉じてウヰルソンの大統領選擧當時の形勢より其の外交政策を講じ、對墨國策政の失敗を述べ、第五回はウヰルソンの外交は其前後を歷史的に觀察すれば不安定なるが如きも、之れを逆睹し考ふれば一貫せるを認むとて米國の外交は能動的よりも受動的なるを特色とすと斷じ、最後に日米關係に論及せり。

◉京都帝國大學第七回夏期講演會

京都帝國大學に於ては例年の如く來八月一日より各種學科の智識普及のため講演會を開催する筈なるが、其内史學地理學に關係ある科目、科外講演並びに其の講師左の如し。(尙聽講志望者は京都帝國大學硫會則照會の上七月二十日限り申込むべしと云ふ)

本邦古代史管見　(自八月九日至十三日)　文科大學講師　文學博士　喜田貞吉

宋明哲學綱領　(自八月一日至七日)　文科大學教授　文學博士　高瀨武次郎

言語比較研究法　(自八月一日至七日)　(殊に國語と他の言語との關係)　文科大學教授　文學博士　新村出

河川流量の測定　工科大學助教授　工學士　平野正雄

(科外講演)

日本人に法治國民の素質ありや　法科大學法制史授業擔當　文科大學教授文學博士　三浦周行

亞細亞諸國に行はれたる文學に就て(幻燈使用)　文科大學助教授　文學士　羽田亨

平安朝末期の京都　文科大學講師　文學士　西田直二郎

◉小川博士支那採集品展覽會

小川理學博士が最近再度の支那旅行にて採集せられし考古學參考品は、去る四月中旬に至りて全部到着したるを以て、五月十三日學内尊攘堂に於て展覽會を開催し、一般有志の觀覽に供せり。その陳列品は佛像十七體、陶器四十點、銅器玉器四點、壙甎二十六點、地誌七十七部等なるが、就中佛像は過半六朝時代の作にして金色燦爛たる北魏正光六年の鍍金佛、形態古撲背銘の上更に畫像石槨の車馬人物を刻せる北魏建明二年造三尊佛石像、刀法峻削にして上部に七天人の舞像ある東魏武定七年造三尊佛石像、正面に觀音背面に線佛臺坐の四周に銘字を刻める北周保定二年石佛、觀

音三像と天女二體とを高さ一尺八寸巾一尺七寸の大理石に刻み、手法秀拔、形容典雅なる六朝佛、其他六朝の四面佛石像、唐代の阿彌陀石像、三彩觀音陶像、元代の喇嘛佛泥像等あり。特に北齊武平三年造石佛は北京に現存せる諸石佛中屈指の名作にして、高一尺八寸三分、臺坐四寸七分、巾一尺二寸七分、厚六寸六分、正面には豐滿なる阿彌陀三尊の下に貌猿の諸像あり　背面にも釋迦三尊の下に衆手拱手等諸樣の猿猴像ありて、臺坐の四面に佛名と其寄附者名を刻し、像銘共に稀觀の逸品なり。又佛像に附せる元始天尊像は唐の開元十九年蔡知什が亡父の爲に造る所、高一尺臺坐四寸巾七寸厚四寸にして、正面に彩色の迹ある優秀なる三尊像と臺銘あり、側背に道俗數人の線像ありて深く注目すべきものなり。陶器の部には、山東省博平鎭の黃土層中より出でし周末の瓦器、關東州金州の古墳より發掘せし高麗燒鉢骨壺及附觸鏤、河南出土の白彩陶盒・緣釉獸環壺・同陶壺・同博山爐及び瓦猪圈・瓦井の類其他土偶十數箇あり。この陶壺土偶の大部は唐代の作品なれど偶像中粉飾半ば剝落せる立男・舞人の像四箇は古雅にして漢時代のものならん。銅器は鼎・敦・錢文斗等にて秦漢の品と思はれ、壙甎は墓壙の周圍又は隔壁に用ひしものにて、長五尺、巾一尺の柱狀のもの、長三尺六寸、巾一尺六寸。長二尺三寸、巾一尺八寸。長二尺、巾九寸位の長方形のもの、勾一尺九寸、股一尺四寸の三角形のもの、さては一端を屋根形にしつらへたるものなどありて形狀一ならず。厚さ大抵五寸内外、兩面に人物鳥獸虫魚草木家屋器具雜物の模樣々表はし、其人物にも騎馬車上禮拜爭鬪等の諸態ありて、樣式著しく畫像石又は土偶に似通へるあり、紋樣も銅器陶器と一致せるあり、殊に五銖錢を印せるもの、亭長の左書と其像あるもの各一甎ありて、大抵漢末より六朝の初期のものなるべく、他の器物と比較攻究せば興味ある結果を得べし。地誌は山東省に屬するもの六十部に近く北支那の研究に有力なる資料を加へたり。是等諸陳列品の大部は神戸市岡崎藤吉氏の寄附に係るものにして、時價に見積りて一萬二千餘圓に達し、學界の美譚として既に世上に喧傳せらる。尙展覽會當日は快晴の好天氣なりしを以て、大谷尊由師、土宜法龍師、豐岡圭賓氏、上野理一氏、京都大學總長諸教授を始め阪神地方よりも多數の來觀者ありて、頗る盛況を呈したり。

◉大阪府南河内郡國府村の石器時代遺跡の發掘

大阪府南河内郡道明寺村大字國府の石器時代遺跡は、近畿地方に於ける此種の遺跡中、夙に學界に紹介せられ、最も顯著なるものゝ一なるに、從來之を發掘して深く學術的研究を試みるものは殆どこれなかりしが、同地方よりは一見さながら歐洲の舊石器に類

する大形粗製のものが他の精巧なる小形の石器よりも深く、獸骨等と共に砂利層の下より出土すといはれ、頗る研究の價値に富めるものゝ如し。乃ち其の存在狀態を確め、旁國府の遺跡を精査せんが爲め京都帝國大學に於ては、去る六月二日より同七日に至る迄國府村字骨地と乾の地點とに於に小發掘を試みたり。文科大學の濱田耕作氏主として之を監督し。小川・內田、喜田博士も之を助けしが、其中乾の方面地下三尺の層より三體の人骨發見せしかば、鈴木足立の兩醫學博士も出張して人骨の採集調査に從事せり今や其の結果に就て聞くに、大形粗製の石器は、尙ほ精巧小形のものと同一の層中より發見せらるゝを以て、異時代のものにはあらずして、偶々我國に斯の如き歐洲舊石器的の形式が殘存せるものと看做す可きなり、又た從來國府の遺跡に於ては石器と伴うて所謂彌生式の土器のみ存すと云はれたり、這回一個の骨格の上より大なる繩紋アイヌ式の土器破片を發見し、續きに福原潛次郎氏發見のものと共に此種土器の存在を確認せるは石器時代遺跡の人種的研究に重大の問題を加へたるものなり、又た人骨は足立博士に從へば、其の一體は脛骨頗る偏平にして、他の貝塚發見のものと酷似せる事實掩ふ可からずと、猶ほ今後研究の結果については重ねて本誌上に詳報するの機ある可し。

◉史學研究會

例會 大正六年六月十二日午後一時半より文科大學第九教室にて本會例會を開催し、左の講演あり。

一、除疫の風俗に就いて　會員文學士　江馬務君

除疫の風俗中特に其の方法に就て述べん。除疫の方法に二あり一は疫の未だ發せざるに先ち行ふものにて、他は病みて後之を行ふものなり。從つて前者は時期略ぼ一定せるに反し、後者は臨時なるを常とす。除疫は一般の階級に行はれたるが、研究上是を(一)公卿、(二)幕府及武士、(三)民間、(四)神社、(五)佛寺に別ちて論ずるを便とすべく、而して自家の爲にする除疫と一般公衆の爲にするものゝ二あり、除疫の風俗の變遷を考ふるに(一)佛教渡來以前、(二)佛教渡來より奈良朝末まで、(三)平安鎌倉時代、(四)室町德川町代、(五)明治以後の五期となる。各期特徴あるが、神社關係及び民間に於ける除疫が發達の極に達せるは第四期なり。各時期に亘れる除疫方法の種類は(一)神社に關する祭事、祈禱、護符、(二)佛寺に依る除疫、(三)天体を祀る風、(四)音等より、(五)動物を使用し、また、(六)食物、玩具に依るありとて一々多くの實例を擧げて細說し、被の事に及べり。

一、秦邊紀略の噶兒旦傳に就いて

會員文學博士　內藤虎次郎君

秦邊紀略には版本と寫本の二種あり版本は同治壬申の年刊行せられたるものなるが刊行せし人は其の著者の名も知らず、著作の年代に就ても誤りてあり。本書の著者は郎潛紀聞の三筆に出で樂份なり。彼は康熙時代の人にして廣陽雜記の著者劉獻廷と友人なりしより此の本の事は廣陽雜記の中にも見ゆ、但し西陲今略なる名によりて記されあるが其の記事の大意より見て、秦邊紀略なることを知るなり。されば此書は康熙時代の著作にして版本にある乾隆時代の記事は後人の竄入なり。著者は清初に於て一種清朝に服せざる學者の一人卽ち顏李學派の顏元・李塨・及び王源などの種類の一人にして吳三桂の反亂を起せし時呼應して江西に起ちし韓大任より吳三桂の許へ援を乞ひに行き、當時吳三桂の軍の清軍と干戈相交ゆるを實見せり。其後陝西地方に在り、靖寧の有名なる提督張勇の幕中に友人ありしより茲に暫く身を寄せ其の間、甘肅の邊境の事を詳細に調査したり、これ此の書の成る所以なり。此書は、顧祖禹の讀史方輿紀要と比較さるゝ者なるが實際上の地理は此書の方確實なりと云はる。版本と寫本とは編次の序に相異あるが廣陽雜記の記述を以て判斷せば寫本の方、原書の體裁を得たるが如し。其の中最も相違せるは最後の部分にして、版本には西域土地人物略の項あるが寫本はこれ無くして噶兒旦傳あり、之も寫本の方が原書の儘なりと考へらる。噶兒旦に關せし記事は清朝の官書にも、平定朔漠方略、蒙古王公表傳等あり、私の著述としては郝韻士の皇朝藩部要略、魏源の聖武記あり、西洋の記述も存し、其の源は恐くは康熙帝の噶兒旦征伐に隨行せし洋人(Gerbillon)卽ち漢名張誠の記事にに據りしものと思はるるが、此の書の記事を參照するに、大體當時の風聞を記したるものとしては價値あれども、委細の點に至り誤謬多し、魏源の聖武記は善く纏めあるも史實に誤多し。藩部要略の記事と秦邊紀略の記事とは大体に於て一致し、就中秦邊紀略の方は彼の祖先及び著述時代の記事精密にして、明代の俺拉特に關する記事に接續し、最も確實なる根據あり、從來は清朝の官書に據りて書かれたる著述の側よりのみ康熙帝と嗣を爭ひたる此の一大人物の傳記を見るに過ぎざりしが、此の書に據りて初めて別の系統より出でし記事を得て、噶兒旦の傳記に關する一部の眞相を明かにすることを得るなり。此書の價値は必しも噶兒旦傳のみに限らず。云々、講演終つて後會場に陳列せる江馬學士講演關係の資料及び別項小川博士支那採集品を展覽せり、參會者數十名にて盛大なりき。

●讀史會

例會　三月廿二日午後六時より學生集會場に於て開く。來會者三浦、喜田、兩博士、西田講師、清原、中村兩學士、松野、牧、富森、下川、古田、丹羽、桑原、鈴木、藤田の諸君なり。席上左の講演あり。

中田法學博士「日本中世相續法の研究」に就きて

牧　健二君

こは昨年の國家學會雜誌二月號より五月號に亘りて連載せられたるものにて、我國中世の相續法中財産相續に關する諸問題を說きしものなり。分つて四節となし、處分、未處分、一期分後家分及女子分、單獨讓與及遺命の各項に就き多數の事例に基づき各種の場合を擧げて之を說明し、尙ほ幾分其の沿革にも論及せり。今先づ其の一端を紹介せば、一、處分に生前讓與と死因讓與との兩種あり、又未處分に遺言と無遺言との、二個の場合あるを論明し、この二大別四小別は實に我國財産相續法の根本的体系を爲せるものなりと述べ、又、二、鎌倉時代に於ては分割相續主義が原則たりしも、已に總領相續及單獨相續の兩種の統合相續法發達し、室町時代の後半には却て前者を壓倒するの現象あるを論圖せり。複雜なる當時の相續法を能く簡明なる系統の下に論述せる、博士の勞を多とすべし。これについて聊か所感を述べんに、中世相續法の研究は甚だ重要にして而かも其の大に困難なるべき種々の原因あるを知ると共に、其の研究方法に就きての一の疑問は、法制史は果して如何なる程度に於て他の歷史より分離して存在すべきものなるかといふを是れなり。中世相續法の研究に當りても、その性質亦に法理を明にせんが爲には、中世の家の關係社會狀態及時代思想等より之を研究するの必要なきか、若し然りとせば、博士の試みられし以外の方面より、之を攻究するの方法あるべく、又其の必要もあらむ。次に所謂單獨相續と總領相續との關係如何、處分は相方契約なりや否や、及中世相續法の由來如何等の問題についても愼重なる研究を要すべし。而して均分及約定の二語も當時の用法に從へば必しも今日の用法と同一ならざるが如し、云々

玉に就きて

喜田博士

日本にて「たま」といふは孔を穿ちて通ずるものに限る。されば漢字の珠も玉も共に當らず。魏志馬韓傳には馬韓人にこの風ありしを書けり。又アイヌにも見る所なればこれらに共通のこゝ、思はれども、特に日本に於て發達したるなり。その中にて勾玉は日本特有のものなり。故坪井博士はこれを以て獸の牙又は爪の形をとりたるならんと言はれたり恐らく然るべし。而して大和民族がこれを用ゐるに至りしは先住民族の風を學びしなり。先住民族に

も種々あれども恐く南方系統のものより傳はりしならん。勾玉の大多數が瑪瑙にて作られたるは其色が獸の爪牙に似たるがためにして、又管玉の多くが出雲石にて作られたるは始め竹にて作りし時の色を傳ふるなるべく、切籠玉の水晶なるは始め水晶を利用せしがためなるべし。又石器時代の遺跡より出づる勾玉に翡翠又は琅玕にて作りたるものあり。これらの鑛物はビルマ地方に產すと云へば、已にこの時代にありてビルマ地方と直接間接交通ありしを知るなり云々

豐臣氏の財政史料に就きて

三浦博士

秀吉の薨去後豐臣家が多く神社寺院の造營修覆をなしたるを以て家康が豐臣家の財を案さしめんがための詭計に出づるなりとの說あれども輕々しくは論定し得ず。これら修覆に關する願文を見るに或は秀吉の冥福のためと云ひ、或は秀頼の武運長久のためと云へるものあり。これらは固より淀君母子の自發的に出でたるものにして、當時にありて誠に當然のことゝ思はる。されども又家康が彼等のために仲介者となりたることもありて、その最も著しき例は方廣寺大佛殿再建のことなり。其他家康の心事を揣摩せる記錄なきにあらざれども、江戸時代には言論の拘束ありたるが故に忌憚なき批評としては寧ろ當時來朝せる外人の觀察を取るべし。例へば日本西教史の如し。余が一昨年朝鮮にて探訪せる天啓甲子日本回答使行中日記（副使承文院判校姜弘重撰）にもこれに關する記事を載せたり。但そは大阪の風聞なるが故に如何程まで信ずべきものなるか疑なきを得ざりしが、昨夏名古屋にて熱田神宮總檢校たりし馬場氏の文書を見たる中に、加藤清正の書狀ありて、文中の事實より推測して慶長四年のものと思はる。これによりて家康が熱田神宮の燒失後勸進によりて再建費を得んこの請を斥けて秀頼に其愈建立をすゝめたることを知り、家康の政略に關する世說を確むるを得たり。されども歷史事實は當時に身を置きて考へざるべからず。社寺の再建は豐臣家の舊臣も同家のため寧ろ望ましきことゝ思ひ居たりしは清正の書狀の文意に徵して知るを得るなり云々。

これより以上の講演に關する談論に時を移し、喜田博士の高千穗峯に就きての新說等も出でゝ十時半散會せり。

例會　四月廿六日午後六時より學生集會場に於て開く。來會者三浦博士、西田講師、江馬、今村兩學士、神浦、下川、牧、辰馬、富秩、古田、鈴木、桑原、丹羽の諸君なり。席上左の講演ありて十時半散會す。

安藤爲章「榮華物語考」に就て　　神浦萬十郎君

此の論文は榮華物語が赤染衛門の作に非ざる說の嚆矢たり。安藤

氏は榮華物語を一人の手に成れりと信じて此の論文を成せるに因り根本的謬見に陷れり。從つて其の所論に就ては「鶴林」の卷迄を問ふ可くして、以降は顧みるに及ばず。其の衛門の作に非ずとせる理由を見るに衛門其の人に關するものと物語の內容に關するものとの二方面あり、人物より見たる理由は先づ「年齡」の事は前述の謬見を去らば理由薄弱なり。次に「宮仕」の事もその履歷等より考へば亦理由動搖す。物語の內容に關して擧げし理由の大部分亦薄弱なれども、(1)當時の才媛紫式部の日記を多く引用せること(2)「玉の飾」なる卷名を衛門の歌より取らずして和泉式部の歌より取りしことの二項は安藤氏の所論中注目に値する者にして有力なるものなり。和田・佐藤兩氏が之を輕視せられしは安藤氏の爲めに憾とす。安藤氏の擧げし諸理由多く薄弱に終れりと雖も亦一の反證なきに於ては右二項は有力理由たる可く、尙安藤氏は擧げざるも一條院御葬送に關する和歌が亦染衛門家集に見いて榮華物語に見ざるは以て物語が衛門の手に成りしに非ざるを思はしむ。故に安藤氏の擧げし右二理由にこの一理由を加へ以て此の物語が衛門の作に非ざる說に贊せんとす云々。

平安朝の女裝

江馬學士

平安朝の風俗の時期に就ては櫻井秀氏が史學雜誌第二十七篇第九號に述べられたり。余も大体同感なり。この時代の初期の女裝は奈良朝と大差なし。衣服令には衣、裙、袍帶、褶の四を擧げたりこの外に下襲、比禮、背子(カラキヌ)の三ありたるならん。その後の女裝に就て考ふるに、西宮記に記す所は延喜よりも古きが知く、それには二種を擧げたり。第一種は長袂、袷襠、裙帶、比禮、裳にして裳の代りに褶・垂緒を用ゐることもあり。第二種は唐衣、比禮裳にして唐衣は背子と異なりて紐あるものなり。その次の時代を示すものは倭名抄にして、背子八唐衣なるべし、裙裳、裙帶、袒袿、單衣、袴なり。次に延喜式となれば、袍、背子、單衣、領巾表袷裙、下裙、袴、單袴、袿衣なり。袿衣は小袿にて略服の時最も上に著するものならん。この時代の服裝を最もよく書けるはうつぼ物語にて延喜より枕草子時代までの過渡期にあるものなり。圓融より一條までは衣服の形式の變化最も影しく、北山抄によれば唐衣は袷襠となり、比禮を用ゐず、打衣と袿とを生じ、又裳が非常に變化したり。藤原時代となりて種々の裝束ありしが、色あひは紅と青とが最も喜ばれ、又重色目と云ふこと多く行はれたりこの頃の服裝は甚だ立派なるものありしが、こは支那より模倣したるにあらずして、日本にて發達したるものなり云々。

王朝の庶民の社會的意義

西田講師

王朝に庶民が如何なる名にて呼ばれしかと云ふに、民庶、黎民、

黔首等あれども、は修辭的のものなり。その中に平民と云ふ語のあるは注意すべきなり。その初見は和銅元年に百官爲本至天下平民とあるにて、平安朝に入りては多く見ゆ。今その意味を考ふるに、第一には公民と云ふ意に用ゐられ、第二には貴賤の對照としてあらはされ、第三には內地人と云ふ意、第四には納稅關係より或一定の土地を有して租稅を納むる者と云ふ意に用ゐられたり。而して平民は貴族賤民等の社會階級に比すれば數多し。故に是が社會問題の對象となり平安朝の治者も無關心なる能はず、ために種々の政策行はれたり。その最も著しきは貨幣改鑄物價公定法にして、こは經濟の事情地方と異りし京都にては最も意味深きものありしなるべし云々。

例會　今村學士の送別を兼ねて五月廿五日午後六時より學生集會場に於て開く。來會者內田、喜田兩博士、西田講師、清原、今村兩學士、神浦、松野、下川、牧、富森、辰馬、古田、鈴木、桑原梅原の諸君なり。席上左の講演ありて十時散會す。

御堂關白記に就きて　　西田講師

藤原道長の日記なる御堂關白記は其原本の今日に傳はれるは此種の日記中原本の存する最古のものなるべく實に史學の至寶たり。其日記は藤原時代の信仰を研究する重要なる史料たるのみならず又其原本を見て御堂關白の風貌の一部を窺ふべしとし、最近、近衛公爵家に於て見るを許されたる御堂關白記につきて述べ、京都大學所藏の同日記との對校、同本が文字の誤り多きのみならず文格の相異せるものあるを說き同本の系統性質を明かにし。近衛家には原本の外二、三種の寫ありて、これらは大体平安朝末のものなるが如く、文字の誤寫、文格の變化する徑路はこれによりて見らるゝなり。尙この外には御堂關白記抄及び無題のものありて、又御堂關白記の中には道長薨去後の承保、康平の頃の記事見ゆるものあるが、それも近衛家所藏本を仔細に檢するによりてそは賴通の子師實が御堂關白記を抄錄し、尙これに師實の日記が混入したるものなるを確に知るを得たり云々。

阿波讃岐備中旅行談　　喜田博士

古墳は普通土を盛りてその中に棺槨を藏するものなり。而して其の古墳の表面には往々砂礫を敷くこと行はれたり。此の事日本紀には、欽明天皇陵に關して所見あり。この風の性質を考ふるには石塚を研究するの要あり。これ今回の旅行にて研究せし事項の一なり。調査の結果によれば、石塚は九州四國等に多く、普通の古墳とは頗る性質を異にするものあるを見る、そは讃岐高松附近の猫塚其の他のものによりて知るを得るなり。兎に角時代にかゝる墳墓を作る民族が四國九州等に居たりしものにして、その時代及

び民族の詳細は明ならねど、恐らくは濊部族に屬し、普通の古墳よりは、稍古き時代より繼續せるものかと察せらる。此の石塚の或る物には、內部を普通の封土とし、表面二三尺の厚さに石を積めるあり、普通の塚に石を敷けるは、更にそれを漂くしたるものに類す。次に備中には近畿の大帝陵にも劣らぬ程の大墳墓二個あり。こは備中にのみ限りたることにはあらざれども、兎に角田舍にかく大墳墓あるは、昔時地方の豪族が甚だ有力にして、その勢時として大和朝廷にも指抗する程なりしことの證となるべく、古代朝廷と地方との關係を知り、地方の國造と稱するものゝ性質を考ふる上に好材料となるべし云々。

◉支那學會

例會　大正六年三月十六日午後七時より文科大學第九教室に例會を開く、來會者、桑原、內藤、高瀨諸教授、矢野、羽田助教授其他會員三十有餘名、左の講演ありて午後十時閉會せり。

龍に就ての考　　文學士　那波利貞君

支那に於ける龍が古來一種の珍怪不可思議のものとして或は理想的動物なりと稱すと雖も、其の原始的思想は必ずしもかゝる神秘的のものには非ざるべく、單に古代民族に通有なる一種の動物崇拜に過ぎざるべき由を論じ、文獻上より見たる龍、歷史上に於ける龍の出現の北支那に多きこと、五行說と龍との關係、四神四靈の起原と龍の關係、辰と龍との關係、十干十二支の傳來に論及し、更に轉じて龍の象形文字の三代の銅器に殘存するものより龍が極めて峻烈日月の如く、一見觀る者をして恐怖心を起さしむる兩眼と喘々人に迫らむとする口を有し、而も古人が之を撫育し得し事を推想し得べく、三代の銅器乃至は漢代の繪畫等に具ゆる龍の繪より其の形態の變遷を探求し、原始的龍の形態は蜥蜴に類似し、矯太なる四足を備へ、耳無く、身體全部に斑點或は薄き鱗を有し、頸は長からずして、全身の半を占め、比較的遲鈍なる運動をなす水陸兩棲の動物なることを推想し、西紀元前後の史料たる十二支表並に埃及古代の十二支に龍が鰐魚として表現せられあることを指摘し、龍崇拜の思想は恐らくはカルヂアの風習が埃及に傳り、更に轉じて支那に入りしなるべきを、Pauthier氏Chavannes氏などの說を引用して說明し、此によりて更に確實なる根據を得むか、蓋し漢民族の西方起原少くとも此の方面の文明が古代漢民族に影響せしことを證し得べきを論述し、漢民族の黃河の上流地方に住する頃は既に本來の龍思想を忘却し、漸く理想化せられ居りて、現に楊子江以南には一種の鰐魚住み居るも、此が原始的思想の龍なることを知らずして、益理想化せられて今日に至れるならむかと論述せり。

蒙古古代の文化　　羽田助教授

那珂博士などが古代蒙古は古來外國民族との交渉少なく其の文化に外來思想の稀なるを說かれしが、余は然らずと思ふと說き起し同博士が元朝秘史に見ゆる蒙古語は十三世紀時代の純粹の蒙古語なりと云はれ漢語より轉入せるものは僅に兀眞、大石、領昆等の數語に過ぎざるべしと說かるゝも、蒙古の官名なる客失克、土兒合兀惕、兀剌赤等の語は明に土耳古語より來り居れば、古代蒙古の文化に異民族少くとも土耳古民族の文化の影響せるを知り得べく、更に研究を積まむか、決して古代蒙古の文明が純粹獨立的のものに非ずして、諸種の民族より影響を受けしを知らんと論述したり。

例會　四月廿六日午後七時半より文科大學第九教室に開く、來會者狩野、桑原、內藤、高瀨諸教授、矢野、羽田助教授其他會員二十餘名左の講演ありて午後十時閉會。

史記の平準書食貨志に就て　　文學士　岡崎文夫君

先づ記述の上より史記の平準書と漢書の食貨志とを比較し、前者は當時の中央政府の財政策、殊に武帝の財政策の記述を主眼とし後者は上下兩卷とし、上卷に於て農業政策の記述を詳密にせしを特色とす、次に兩史の列傳に於ては史記が詳しく記せる致富の術及び經濟財政並びに富の地方的分布を記述せる部分を、漢書に於ては省略し、其の一部分を地理志中に採用せるも、史記の主眼たる經濟中心の觀念失はれて、漢書は專ら各地方の風俗民情を中心として記述せり。次に兩史に於て夫れ〳〵志傳を作れる目的の上より比較を試み、結局史記は漢代に於ける實際社會の經濟的活動及び中央政府の經濟政策が一般的政治乃至社會に及ぼせる影響を論述せるものと見るべく、漢書は寧ろ時の正統學派の說を根據として中央政府の包括的經濟政策を記述せるものと解すべし、と結び、最後に兩者の價値に於て批判を加へたり。

一、新版「東達支那記」Cathay and the way thither　　桑原教授

此の講演は本誌批評欄に掲載せるを以てこれに讓るべし。

例會（豫餞會）　五月二十四日午後四時より京都帝國大學々生集會場にて卒業生の豫餞會を開く、會する者狩野、內藤、桑原、高瀨諸教授、羽田、矢野、今西各助教授、富岡講師、卒業生、在學生等二十七名、席上次の講話ありたり。

一、支那旅行談　　富岡講師

當日の講話に其後同氏より聞き得たるところを補記せんに、氏は

去三月中旬より四月初にかけて上海杭州方面に出張し、上海に於ては、同地の藏書家繆荃孫氏以下を歴訪したりしが、繆氏は今宋元板を蒐集して楊守敬の留眞譜の如きものを作り、古書の覆刻に勉め、尙古書の校勘記なる夔風樓讀書記二册を初め、續々公刊像定のものあり。又た富豪にて藏書家たる張鈞衡氏（張石翁）は適園叢書以來、尙盛に古書の蒐集及び出版に勉めつゝあるが、藏書中著しきものは、宋槧の東都事略、資治通鑑（國所あり）胡克家本の宋槧文選李善注本の原本等なり。其他王莽鏡一面は從來見聞れざる優秀品にして、且つ漢書王莽傳の記事を傍證すべき銘文あり、劉氏嘉業堂（劉承幹）は多數の宋元版を有し殊に宋槧の兩漢書は注意すべし。嘉業堂叢書數百册は、已に上梓せるが續刊の計劃に忙しく、所藏中には翁方綱の四庫提要の原稿數十册あり、次に徐氏（徐乃昌）は種々の名により、宋元版の覆刻刊行をなせるが、氏は自家所藏の外、〻熟の盟氏鐵琴銅劍樓所藏の書を影寫し出版せり。氏は又た古鏡の蒐集家を以て聞こ、三百餘面の家藏あり。漢の建安元年鏡以下吳等の年號有る古鏡多く、圖譜出版の計畫ありといふ。杭州に於ては、靈隱寺の飛來峰を見物したるが、岩石に雕刻せる佛像驚くべきものあり。阮元の兩浙金石記などには此處には元代のものを最古とする由見ゆるも、現存のものに晩唐の咸平年間の造像多く、五代北宋のもの多きことをも發見せり從來日本にて知られざりしは杭州府學に存する南宋元明の石刻にして、殊に注目すべきは南宋高宗の御書なる六經論孟の石經八十餘石の存することなり。阮元等に據れば秦檜の跋は悉く削去れりと云ふも、現今其の存するものあり、是れ從來金石家に多く知らざる所なり、最も興味あるものは李龍眠の筆なる孔子及七十二弟子の像にして、高宗の讚あるものあり。此等は明の正德年間に吳訥の發見に係る所なり。宋の仁宗の飛白書「四海太平人民淸」の七字は慶曆八年の年號ありて、道光年間に發見せられしもの、又南宋理宗の聖賢贊の大字存す。新しきものにては阮元が寧波の天一閣の北宋拓石皷文覆刻、其他宋元の杭州府學記めり此等の拓本は多くこれを將來せり。尙ほ西湖の周圍は五代及宋人の碑文題名無數に存す云々。當日の陳列品左の如し。

燕山楚水、上海指南、增訂西湖遊覽指南・西湖圖、杭州圖、武林金石記、武林叢編、浙程備覽、湖山便覽、西湖志餘、增刻西湖聯、西湖風景寫眞等

◉地理學研究會

例會 五月十八日（金）地理學研究室に於て開き左の講演あり。

印度の港灣に就て　下田禮佐君

印度帝國は三面の海岸線を有す、卽ち印度半島の東西二面と緬甸の西面となり、此中半島の西岸は北は岩角多く南は砂漠にして、

殊に南西季節風の卓越する時は風波荒れて孟買、カラチ、二港の外は船を入るゝ所少し。半島の東岸は全く砂濱にして海岸より數哩間は吃水十五呎以上の船は近寄るべからず、マドラスの如きは全く單なる碇泊所（ロートステット）にして港といふを得ず、されば外國貿易船の大部分は恒河下流の甲加陀に集中す、緬甸の海岸は比較的良港多く、アラカンの海岸にバサイン、アキアブチタゴンゲあり、テナツセリムの海岸（ヒンデルランド）にムルメイン、ダヴォイ、メルゲイ等あれども何れも後方地域の狹きを憾みとす、隨て外國貿易船はイラワヂ三角洲にある關貢なる河港に集まる、以上の如き一般論に次で各港別にそれ〳〵地形、沿革貿易の現狀及び港としての長所と缺點とを指摘し港灣委員會、港灣トラスト等の制を附說する所ありたり。小川教授は之を批評して一般的の海岸研究法を述べられたり。

例會　同二十九日（火）地理學研究室內に催し、左の二氏の講演あり。

石灰岩臺地（カルスト）に就て　　勝田圭三君

カルストとは石灰岩又は白雲岩地方に發達する臺地にして主として水の浸蝕によりて其表面及び內部に特殊の地形を生ずるとて、ドリヲ、ポリエ、谷狀盆地、鐘乳洞、地下流、天然橋（ナチュラルブリッヂ）等の地形をそれ〳〵實例に就きて說明し、次で此地形の世界に於ける分布を述べ、殊にチナルアルプのカルスト、及び北米ケンダッキー州の洞穴に關して精細なる叙說を加へ、最後に日本に於ける此の種の地形の分布を談り、殊に其代表的なる山口縣秋吉村附近のカルスト實査の報告をなせり。

九州島の海岸に就て　　大塚曾一郎君

海岸線の狀態は一國又は一地方の人文と密接なる關係を有し、地理學上頗る重要なる問題なり、惟ふに海岸の構造は第一其地體を構成せる地質の如何に基き、其上に內外二力の作用せる結果に外ならず、されば先づ九州の全岸を地質に依りて數區に分ち、各區毎に海岸距離と直線距離との比を地圖上の器械測定によりて出し屈曲の程度を知りて、更に內外二力の作用を併せ考へ、此が說明を試みんとす、

（一）部崎、日の浦北角間（北岸）二・四三　（二）日の浦北角三角間六、〇五　（三）三角野間崎間一・八六　（四）野間崎火崎間三・七八　（五）火崎部井崎間二・〇九　（六）部井崎細島崎間一・三七　（七）細島崎地藏崎間五・〇〇　（八）地藏崎部崎間二・三六

右の數字によれば海岸線の發達は九州西岸北半を以て最となす是れ地體の變動を受くること最も甚だしき瀨戸內式なる特殊の形態に屬し、岩石は浸蝕を受け易き結晶片岩及第三紀層等よりなり、加ふるに海岸一帶に沈降しつゝあるを以てなり、第二位に位する地藏崎以南綴齒狀をなせるは山脈走向の橫斷部に當り、所謂大西

洋式に屬す、第三に野間崎火崎間は琉球灣の横斷部に當れど、大部分隕出岩に蔽はれたれば、鋸齒狀をなすことなく、吹上濱の如き火山沙の沙濱と、山川火口港の如き特殊の地形を作れるを見る云々。

遠足 五月二十七日(日)小川教授の指導にて、會員一同午前六時四分京都驛發大阪難波にて南海線に乘り換へ、尾崎驛にて下車、之より尾山越により和泉山脈を横斷して、紀伊山口に出で、和歌山を經て、更に南海線沿道孝子、深日間をも視察し、中生紀末期の生成に係る本山脈和泉砂岩層の岩質層位及び其褶曲の有樣を調査して同夜歸洛せり

◉高嶋秋帆追遠法會

火技の中興洋兵の開基たる秋帆高嶋四郎太夫の追遠法會は去る五月二十日本郷駒込の墓所大圓寺本堂に於て擧行せられたり、同日午前八時式を始め、男爵上原陸軍大將祭文を捧讀し之に續きて門人たる細川男爵を始めとし門人親戚血主並に參詣の士順次焼月院殿岩水秋帆居士の靈前に進み焼香禮拜し式後境内の北なる墓前に香華を手向げ、隣地駒本小學校に於て三上文學博士の「高嶋秋帆先生に就て」の講話を聽き、陳列せる遺品を展觀せり。遺品には詩幅最も多く畫幅其間を點綴し、器具珍品尺牘等も亦多く其數二百五十點を過ぎたり、就中其最も優且つ珍とすべきものは德丸原演武の圖同演習に使用せられたる當時の砲彈を應用して製作せる器物故人の肖像、佩刀と諸印、社祢及幽四中の尺牘等なりき。(會員押上森藏氏報)

◉「修學旅行京都史蹟案内」大正六年版の發行

さきに京都帝國大學學友會に於て中等程度の諸學校の修學旅行用として發行したる三浦博士監修、西田魚澄二學士編纂の「京都史蹟案内」は其後一年余にして坊間一本をも止めざるに至りしを以て今回之れを增訂し大正六年版として發行せり。本版に於ては先内容記事に於て補正を加へたる外、其の最も特色ある旅行日程表に於ても其後踏査して訂正するところあり。更に史蹟地圖一葉と年表及び索引を新たに加へ年表によりて記事中の時代の觀念を明確にするに資し索引にては又史蹟及び美術に關する精密なるものを以てして、檢索に便にしたり。其用意周到なるは記事の親切なると共にいよ〳〵本書の價値を大ならしめ、千載の史蹟に富む舊都の案内記として蓋し最も特色あるものなるべし。(京都二條河原町寶文館發賣定價四拾錢)

◉古地圖展覽會

奈良女子高等師範學校關係者を中心とする奈良地理歷史會にては去六月三日、同校内に於て例會を開き、古地圖の陳列を行へり席上西田同校教授の「我國に於ける地圖製作略史」と題する講演

あり、出陳地圖に於ては、總數三百六十五點、之れを六類に分ちて、總圖（日本圖世界圖）地方圖、都市圖、交通圖、境內圖及古戰場雜等とし、總圖中には唐招提寺所藏行基日本圖、明時代のものと推測せらるゝ西大寺所藏の萬國總圖等を初めとし地方圖にては、中村雅眞氏所藏天平寶字二年の東大寺墾田地圖、北浦定政自筆「大和平野坪割圖」等あり。東大寺藏大和全圖は奉行所のものにより寫したるものにして最大の大和國たり。都市に於圖ては、寛文の南都圖、長祿二年の江戸圖、其他京都、大阪、長崎、函館、兵庫、横濱、鎌倉、奈良、山形のものありて、寛文版奈良圖に於ては大佛の露佛たりし狀を見るを得べく交通圖にては、寛文九年版和蘭出版、長崎江戸間交通圖（野田氏所藏）古戰場圖にては文祿三年版阿紀山城之圖を初め郡山城高取城圖、笠置山元弘戰圖、金剛山圖の如きあり、境內圖にては天平勝寶八年の水無瀨給圖同年の東大寺圖等ありたり。

會報

例會　大正六年五月十二日午後一時半より文科大學第九教室にて本會例會開催せられ、左の講演ありたり、

除疫の風俗に就いて（標本説明）　會員文學士　江馬　務君

秦漢紀略の噶兒旦傳に就いて　會員文學博士　內藤虎次郎君

編纂會　五月廿一日文科大學內陳列館に史林第二卷第三號の編纂會を開き三浦、桑原兩評議員及び各委員出席したり

寄贈交換書目

聖德太子傳（境野黃洋著）　丙午出版社
釋迦牟尼傳（常磐大定著）　丙午出版社
ニクブン文典（中目覺著）　著者
賀茂眞淵と本居宣長（佐々木信綱著）　廣文堂
歷史地理四、五、六號　日本歷史地理學會
東洋哲學五、六號　東洋大學
飛彈史壇四、五、六號　飛彈史談會
國學院雜誌四、五、六號　國學院大學
地歷研報四、五、六號　一聲舍
史學雜誌四、五、六號　史學會

入會

福岡縣若松市濱ノ町三丁目　柴田喜八
（右紹介者　中山平次郎）
東京市外高田村雜司ケ谷三一一　重松俊章
（右紹介者　喜田貞吉）

京都市下京區本町九丁目東入　金子吉祇
（右紹介者　高橋萬次郎）
大阪市北區堂島濱通二丁目　大久保利武
同　市南區北桃谷町四八　小田久太郎
同　市東區高麗橋通五丁目十二　富田仙助
京都市下京區大佛方廣寺　木下寂善
同　市上京區出町桝形西入相生町　多田桓
同　市外鷲峰村　森田清之助
朝鮮京城府元町二ノ七八　瀨野馬熊
同　市四谷區舟町二十一　早川純三郎
（右紹介者　三浦周行）
大阪清水谷高等女學校　友納養德
（右紹介者　有高巖）
東京市小石川區林町九三　遠藤佐々喜
東京市小石川區竹早町　折口信夫
同　市同區金富町五二高梨方　西川榮
（右紹介者　西田直二郎）
滋賀縣蒲生郡中野小學校　柴謙太郎
（右紹介者　中村直勝）
東京市麻布區霞町二一　鳥居龍藏
同　本郷區駒込千駄木町十三番壽館　板澤武雄
（右紹介者　梅原末治）
京都市寺町四條南　黑田俊之亮
岐阜縣稻葉郡南長森村藏前宮東　大野繼之進
（右紹介者　江馬務）

●會費領收報告（振替貯金拂込のものに限る）

（大正六年五月三十一日迄に受領の分）

一金一圓二十錢（大正六年分）
山本元　鑑淵一　稻葉倉吉　岡部保治郎　奥秀太郎　高屋善吉　重松俊章　西田與四郎　高松清　森彦太郎　大口喜六　高橋清之助　三輪榮三郎　小島捨市　大橋金造　吉村宇一郎

一金一圓五十錢（大正六年分）
口入田覺了　北峰順修　橋川正　玉置由次郎

一金二圓四十錢（大正五、六年分）　瀨野馬熊

一金一圓二十錢（大正六ノ四ヨリ大正七ノ三マデ）　山村材夫

一金一圓二十錢（大正七年分）　酒井忠一

一金一圓（大正五年下半期分但四十錢殘リ）　山下四郎

一金一圓八十錢（大正六年下半期及大正七年分）　柴田喜八